

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

■ 2023年8月30日(水) 11:25 ~ 12:09 | 会場 RYB1 良心館地下1階 R Y B 1 番教室

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長：内田 若希（九州大学）

11:25 ~ 11:39

[競技スポーツ-A-09] アクションリサーチを用いた中央競技団体事業マネジメント担当者に対する学習支援の検証（方）

*山下 修平^{1,2}、和久 貴洋^{1,3}、尾縣 貢³ (1. 日本スポーツ振興センター国立スポーツ科学センター、2. 筑波大学スポーツウェルネス学学位プログラム、3. 筑波大学体育系)

11:40 ~ 11:54

[競技スポーツ-A-10] トップアスリートの心理的競技力が自身のメンタルヘルスに与える関係性について（心）

*早川 琢也¹、高橋 由衣²、實宝 希祥²、近藤 みどり²、柄木田 健太²、大西 壮流²、立谷 泰久² (1. 京都先端科学大学、2. 国立スポーツ科学センター)

11:55 ~ 12:09

[競技スポーツ-A-11] 学生アスリートのメンタルヘルスに関する研究（心）

チームスポーツの事例調査

*堀野 博幸¹、並木 伸賢² (1. 早稲田大学、2. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長：内田 若希（九州大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ～ 12:09 RYB1 (良心館地下1階 R Y B 1 番教室)

11:25 ～ 11:39

[競技スポーツ-A-09]アクションリサーチを用いた中央競技団体事業マネジメント担当者に対する学習支援の検証（方）

*山下 修平^{1,2}、和久 貴洋^{1,3}、尾縣 貢³ (1. 日本スポーツ振興センター国立スポーツ科学センター、2. 筑波大学スポーツウェルネス学学位プログラム、3. 筑波大学体育系)

公費が投入される競技力向上事業において、事業推進体制が適切に整備できず、計画した方策を実施しきれない中央競技団体（NF）は、期待した成果を創出できていないことが課題となっている。その背景には、多くのNFが慢性的な人手不足であり、組織能力を向上させるための人材育成や事業マネジメントに目を向ける余裕がないという現状がある。この課題の解決は、NFの組織内での取り組みだけでは難しく、組織外部からの働きかけが必要であると考え。そこで本研究は、NFだけでは解決が難しい課題解決の糸口を発見することを目指した学習支援の実践を通じて、NF事業マネジメント担当者への学習支援の成果と課題を明らかにし、より効果的な学習支援を行うための示唆を得ることを目的とした。本研究では、アクションリサーチ法を用いた。アクションは、小規模NFの事業マネジメント担当者4名に対して、3つの学習支援プログラム（研修、実践共同体、メンタリング）をパッケージ化し、提供することである。その過程を記録した上で、プロセス分析、ステークホルダー分析を行い、具体的な課題解決のための働きかけと反応を検証した。これらの分析は、議事録、メール等の文書、アンケート回答などの質的データに基づき行った。その結果、強化現場とNF事務局との間で利害や意見の調整を行っている対象者には、交流や越境によって得られた情報を活用した課題解決のための行動が見られた一方で、対象者が強化現場でのコーチの役割を兼ねている場合には、意識や行動の変容を生み出すことが難しかった。また、プログラムの企画、実施の過程において、計画段階では想定していなかったプログラム提供を行う組織の成員への支援が必要となった。NFに対する効果的な支援を行うためには、支援の内容や提供方法を検討するとともに、支援する側の組織の組織能力を向上させる方策についての検討も必要である可能性が示唆された。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長：内田 若希（九州大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ～ 12:09 RYB1 (良心館地下1階 R Y B 1 番教室)

11:40 ～ 11:54

[競技スポーツ-A-10] トップアスリートの心理的競技力が自身のメンタルヘルスに与える関係性について（心）

*早川 琢也¹、高橋 由衣²、實宝 希祥²、近藤 みどり²、柄木田 健太²、大西 壮流²、立谷 泰久² (1. 京都先端科学大学、2. 国立スポーツ科学センター)

世界保健機関（2022）では、メンタルヘルスは日常のストレスに対応、自分自身の能力を認識、学習や仕事、自分が所属するコミュニティへの貢献、が実施できるような心の健康状態であると説明している。国際大会でプレーをするアスリートは、極度のプレッシャーに晒されやすい環境下でプレーしており、その結果として様々なメンタルヘルスの課題や心的疾患を抱えているケースが少なくない（Reardon et al., 2019; 立谷, 2018）。このように、アスリートのメンタルヘルス支援は重要な課題であるにも関わらず、十分な支援や情報が行き届いていない現状が窺える。これまで、メンタルヘルスの啓蒙や支援については、教育的支援やスティグマへの対応が主であったが、選手個々の心理的競技力に基づいたメンタルヘルスの支援方法については十分な検証がされてこなかった。そこで、本研究は、主要国際競技大会でプレーするトップアスリートの心理的競技力とメンタルヘルスの関係性について分析をすることを目的とした。オリンピック・パラリンピック出場経験のある114名を研究対象者とし、JISS競技心理検査（J-PATEA）とK10（メンタルヘルスを測定する尺度）について有効回答を得た。得られたデータについて、J-PATEAの下位尺度3つ（心理的スキル、自己理解、競技専心性）を独立変数とし、K10の総合点を従属変数とした重回帰分析を実施し、性別（男性65名、女性47名）、競技特性（個人種目：81名、チーム種目33名）による比較と、研究対象者全体の傾向について分析した。その結果、研究対象者全体、女性群、個人種目群において、自己理解がK10の総合点に与える影響が確認された（ $B=-0.28$, $B=-0.39$, $B=-0.56$ ）。この結果から、自己理解能力の高まりがアスリート自身のメンタルヘルスに好影響を与えている可能性が示唆された。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会 | 【課題A】 トップアスリート養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題A】 口頭発表③

座長：内田 若希（九州大学）

2023年8月30日(水) 11:25 ～ 12:09 RYB1 (良心館地下1階 R Y B 1 番教室)

11:55 ～ 12:09

[競技スポーツ-A-11]学生アスリートのメンタルヘルスに関する研究（心）

チームスポーツの事例調査

*堀野 博幸¹、並木 伸賢² (1. 早稲田大学、2. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科)

現在、競技スポーツで活動するアスリートのメンタルヘルスが注目されている。近年の研究では、現役トップアスリートのうちメンタルヘル스에課題を抱える者の割合が30%を超えることが報告されている（Gouttebarger et al., 2019）。そのような状況から、それらメンタルヘル스에課題を抱えるアスリートへのサポートの重要性が指摘されている。その一方、競技スポーツのアスリートに関するデータ蓄積と多様な視点からのメンタルヘル스에関わる分析評価が課題となっている。そこで本研究では、競技スポーツで活動する学生アスリートのメンタルヘルスについて、チームスポーツに注目して調査を行った。調査では、同一種目で所属リーグの異なるチームに所属する学生アスリート男性184名に対し、webアンケート（Kessler 6 scale日本語訳版、Baron Depressing Screener of Athletes日本語版）を実施した。

その結果、所属クラブ内でパフォーマンスレベル別に分けられる所属カテゴリによってメンタルヘル스에差異が存在することが明らかとなった。その一方、所属リーグによる際は認められなかった。本研究の結果から、チームスポーツアスリートにおけるメンタルヘルスに対し、チーム内での競技レベルによる階層が大いに影響することが示唆された。今後は、競技特性の異なる多種目のアスリートに対しても同様の調査を広げていくことが課題となろう。